

新潟医療福祉大学学習支援センターの利用実績から見る現状と今後の課題2：センター利用者の成績から捉えるニーズ

遠山孝司^{1) 3)} 押木利英子^{2) 3)} 若井和則³⁾ 船山澄子³⁾

¹⁾ 新潟医療福祉大学健康スポーツ学科 ²⁾ 同理学療法学科

³⁾ 新潟医療福祉大学学習支援センター

【背景】

近年の大学教育において、多様な大学受験方式を利用した入学者の中に高校での科目履修が十分でないものが少なからずいる¹⁾などの理由から大学に入学後単位取得が困難になる学生が存在し問題になっている。そのような中、大学教育と大学生の学習をサポートするため、多くの大学が学習支援センターを設置している²⁾³⁾。資格取得および取得した資格を活かした就職を特徴に持つ新潟医療福祉大学の同センターの活動は他大学のセンターに求められる活動と少し異なる可能性がある。さらにセンターの活動の効果を上げるために、設置後の活動について実態把握し、今後の課題を明確にする必要がある。そこで本研究では、どのような学生がセンターを利用しているのかという観点から現状分析を行う。

【方法】

学習支援センターで記録・管理している2012年度前期のセンター利用者（科目指導、学習相談、セミナー、ワークショップ）の記録と当該学生の2012年度前期のGPAおよび2012年度前期の当該学生が所属する学科、学年のGPAの平均値、標準偏差をデータとして使用した。

【結果】

2012年度前期に学習支援センターを利用した学部学生は93名であった。このうち、現在も在籍し、個人が同定できる79名の2012年度前期のGPAを偏差値に換算し、どのような学生が、学習支援センターを利用しているのかを検討した。

学年別に偏差値分布を検討すると、1、2年生については、成績下位30%群（偏差値45未満）と成績のやや上位20%群（偏差値50以上55未満）の学生のセンター利用が多い傾向にあった。成績上位30%群（偏差値55以上）も、単位取得に困難を来していることは予想しがたいが、一定数の利用者がいた。ただし、3年生は1、2年生に比べて成績下位30%群（偏差値45未満）の利用者が少なく、成績上位30%群の利用者が多い傾向が示された。

表1. 学習支援センターの学年別利用偏差値層

学年	45未満	45～50	50～55	55以上	合計
1年生	24 40.0%	10 16.7%	16 26.7%	10 16.7%	60
2年生	5 41.7%	2 16.7%	2 16.7%	3 25.0%	12
3年生	1 14.3%	0 0.0%	2 28.6%	4 57.1%	7
合計	30 38.0%	12 15.2%	20 25.3%	17 21.5%	79

ここから、学習支援センターに対する学生の需要が、単位修得に向けての支援だけでなく、よりよい成績をとるまたは自己の能力を高めるなどのスキルアップの方向に向けての支援にもあったこと、高学年になると低成績者の単位修得に向

けてのサポートの需要が低くなっていたことが推察される。

さらに、学科別に偏差値分布を検討すると、成績下位30%群（偏差値45未満）のセンター利用率が学科によって大きく異なる。学習支援センターによる単位修得に向けての支援が全ての学科の学生に等しく利用されている訳ではない。

表2. 学習支援センターの学科別利用偏差値層

学科	45未満	45～50	50～55	55以上	合計
理学療法	5 50.0%	2 20.0%	3 30.0%	0 0.0%	10
作業療法	0 0.0%	2 18.2%	6 54.5%	3 27.3%	11
言語聴覚	0 0.0%	2 66.7%	0 0.0%	1 33.3%	3
義肢装具	6 35.3%	4 23.5%	3 17.6%	4 23.5%	17
臨床技術	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	2
健康栄養	6 46.2%	1 7.7%	3 23.1%	3 23.1%	13
健康スポーツ	0 0.0%	1 20.0%	2 40.0%	2 40.0%	5
看護	10 76.9%	1 7.7%	0 0.0%	2 15.4%	13
社会福祉	1 20.0%	0 0.0%	2 40.0%	2 40.0%	5
合計	29 36.7%	13 16.5%	19 24.1%	18 22.8%	79

【考察】

本研究においてはセンター利用者の偏差値から、どのような学生が科目指導を受けに来るのか、学習支援センターに対する学生からの需要を検討した。その結果、センターには単位修得に向けての支援とスキルアップに対する支援が期待されていることが明らかにされた。今後もこれらはセンターの果たすべき役割としてさらに改善発展させていく必要がある。また、学年による差異、学科による差異も傾向として示されたが、データのサイズが十分ないため、継続してデータを収集し、これらの差異が継続して存在し問題となる場合には、対応内容と方法の検討が必要となる。

センターの果たすべき役割については、センター登校、学修支援、休退学者の減少に向けた対策なども期待される。それらの視点も含めて、センター利用の前後の学生の成績や大学生活への適応の変化についても検討し、大学の教育に適した支援に向けた努力が求められる。

【結論】

新潟医療福祉大学の学習支援センターは、低成績者の学習支援だけでなく、スキルアップのための学習支援の役割も果たしている。ただし、一部の学科で低成績者の利用率が低いことから、今後低成績者の支援体制をどのように整えるのが課題の一つになると思われる。

【文献】

- 1) 及部治人. 工学部学習支援センターにおける物理教育. 大学の物理教育 2007;13(3): 134-138.
- 2) 小山哲也, 本田竜広. 広島工業大学における初年次数学教育：教育学習支援センターの活動と数学教科書作成を中心として. 工学教育研究講演会講演論文集 2011;59: 28-29.
- 3) 水町龍一, 井上秀一, 北川和麿, 鈴木雅之, 山内憲一, 湯浅凶南雄. 学習支援センター活動報告. 湘南工科大学紀要 2008;42: 85-98.

【付記】

本研究は平成24年度新潟医療福祉大学研究奨励金(学長裁量研究)にて行われたものである。また、24、25年度学習支援センター運営委員会全委員のご協力に感謝する。